

認知症高齢者のグループ回想法実施上の課題

野村 勝彦

Tasks of Treatment of Group Reminiscence Therapy for Old Persons with Dementia

Katsuhiko Nomura

1、認知症高齢者に対する心理療法

認知症高齢者の問題は認知障害だけにとどまらず、抑うつや不安などの情動的な問題も少なくない。以前のよう自立した活動ができないことで、自尊心の低下や抑うつを体験する認知症高齢者は多い。なかには、周りの人に迷惑をかけていると感じて、周りの人との交流に消極的になり、引きこもりがちになる人もいる。こうした情動面の問題は、認知症高齢者の生活行動内容を悪化させるばかりか、認知症の症状そのものを悪化させる。そのため、これらの人々の情動的安定や生活行動内容の維持および向上を目指した心理的援助が必要である。筆者は心理的援助の方法として回想法を実施している。

回想法はアメリカの Butler (1963) によって確立された高齢者を対象とする心理療法の技法である。高齢者の過去の回想に専門家が共感的受容的姿勢をもって意図的に働きかけることによって、高齢者の人生の再評価を促し、心理的安定をはかっていくものである。回想法の適用は、一般高齢者の精神的健康の維持向上から、高齢者の抑うつ状態に対する治療、認知症者に対する働きかけなど広範囲にわたっている。回想法には個人を対象とした個人回想法と集団を対象としたグループ回想法に分けることができるが、筆者は認知症高齢者を対象として、グループ回想法を2001年5月から実施している。

2、現在の実施施設

2005年12月現在、A市のR施設とH施設とB市のF施設

表1 回想法参加者

R		H		F		S	
参加者	年齢	参加者	年齢	参加者	年齢	参加者	年齢
①RA	96	HA	93	FA	97	SA	94
②RB	93	HB	88	FB	94	SB	93
③RC	93	HC	88	FC	91	SC	93
④RD	89	HD	86	FD	90	SD	91
⑤RE	89	HE	85	FE	84	SE	89
⑥RF	85	HF	81	FF	83	SF	81
⑦RG	80			FG	82	SG	81
⑧RH	77			FH	81	SH	77
⑨RI	76						

とS施設の4箇所でも2回ずつグループ回想法を実施している。R施設は2001年5月から、H施設は2001年9月から、F施設は2005年1月から、S施設は2005年10月からである。表1は各施設の回想法参加者の人数と年齢である。

3、回想法の展開

回想法の実施は筆者がすべてリーダーとなり、施設職員が1、2名コ・リーダーとして参加する。コ・リーダーは難聴の高齢者や言語理解が不十分な高齢者に対して、いわば通訳的な役割を果たすスタッフである。

回想法の展開は次のような順序で行う。

(1) はじめの挨拶

円卓の周りの椅子にかけた参加者に挨拶する。参加者は自分の名前を述べる。その後、体調をきくことにしている。

(2) その日のテーマの提示

テーマはあらかじめ筆者が施設のスタッフと話し合っで決める。そのテーマに沿って用意した刺激材を参加者に示しながら、その日のテーマを提示する。

(3) テーマに関連した参加者の語り

用意された刺激材—実物、写真、模型—を見ながら参加者はそれぞれの昔の記憶をたどりながら、自分の体験を自分の言葉で語り始める。参加者は自分の記憶していること、体験したことをすぐに話す人もいるが、なかなか思い出せない人もいる。延々と話す人もいれば、単語だけの人もいる。

(4) 参加者同志の話し合いの援助

参加者は自分の言葉で話すため、他の参加者に理解できないことがあるために、他の参加者にも理解できるように言葉を加えたり、他の言葉に代えて説明をしたりする。延々と話す参加者に対しては適当にきりあげるように言葉かけをする。発言したくていららしている人には素早く指名する。

(5) 思い出の歌の斉唱

終了の時間が近くなると、この日のテーマに関連した歌や、その季節にあった歌を2曲、全員で斉唱する。参加者全員が歌詞を印刷した紙を持ち、歌詞を見ながら歌

う。

(6) 終わりの挨拶

終了時間(1時間)になると、終わりの挨拶をし、次回の会を約束して終了する。

4、回想法の実際

回想法実施は200X年12月20日

テーマは「もちつき」

1、逐語録 (Thの発言は<>で表す)

(1) 挨拶後、それぞれに名前と体調を聞く

D: 元気です(手振りつき)

G: 高いに○○の○です。こっちにきて病気ひとつしな
いのです。

B: (Thからの体調の問いかけに) 腰が痛いからどう
したらいいですか? 真ん中あたりなんです。

<それは大変ですね。そうとう痛むんですか?>→
Bへ

B: 痛むほどじゃないけど、少し痛いですかねー。

<(前回はお腹が痛いと言っていたため) お腹は痛
くなくなりましたか?>→Bへ

B: お腹はどうもありません。

C: ○キミエ。おかげ様で。

H: (Thが問いかける前に、Cの発言後、自然に話し
始める) ○○ツネコです。おかげ様で元気です。

F: (Thが問いかける前に) Fです。ありがとうございます。
元気しとります。(自分の発言が終わるとE
さんに向かって) あなたよ。

E: ○○ツネコです。

<お名前が一緒なんですか?>→EとFへ

F: 漢字が違うんですよ。常と○○の典なんです。

(2) 全員の名前と体調確認後、今日のテーマに入る

<今日は餅つきの話をしましょう。これは何でしょ
うか?>と全員に言いながらテーブルの真ん中にある
鏡餅を皆に見せる。

E, F, H: おかがみ

C: うち方は今でも大きいのを供えますよ。自分ちでも
ち米なんかから作るからね。

<もちをつくのは誰ですか?>→Cへ

C: 主人がつきます。そして子どもがもむ。

それでお正月やらお彼岸はしてましたね。

<Bさんは餅をついたことがありますか?>

B: もんだりはするけど、ちぎれないですね。力がない
けん。

C: もむのは子どもの仕事ですもんね。

<Bさんのところは、餅は誰がついていたんです
か?>

B: そうですね。今は商売人がついて回りますからねー。

<子どものころは?>→Bへ

B: うーん、やっぱりお父さん。そして上の兄弟がもむ。

C: やっぱしお父さんやね。それで、子どもがもむ。近
所から手伝いに来ったですもんね。

<ああ、そうか。近所から手伝いに来るんです
か?>→Cへ

C: そうねー。

<Gさんは子どもの頃、餅をついたことありませ
うか?>

G: ならしていく。ついたことあります。

C: (わりこみつつ、笑う)

G: 百姓やけんな、派手にやりますよ。並べてな、むし
ろの上に置いてな、お正月のお祝いにな、3人娘でな、
お父さん早くに亡くなったから…。臼があるわなあ、
あれに餅つつこむねん。お正月の、お祝いです。そん
なこと考えると涙出てくる…。(泣き出す)

<がんばってきたんですね。四国は九州とは違うん
でしょうね。>

G: うん、違いますね。百姓やからな、餅ついてな、む
しろみたいに…(前の話を繰り返す)

<Dさんは?>

D: 大変でした。落ち着いて餅つきできない。女がよっ
てましたから…。

<男がいないとつけないですもんね>

D: そうなの。

Cさん 手すりをパタパタと、ちょっとつまらなそうに
している

<Eさんは?>

E: してないですね。

B: 私たちのころは竹で踏んでね、2階に拵けて粉が落
ちていくから…。そんな記憶があります。でも、それ
が楽しみですけどね。

<Cさんもそういうことありました?>

C: (待ってましたとばかりに) 昔はうち方は足で踏ん
で、あとはつくんよ。そういうのは、どっこも持っ
とんしゃーよー。

<足で踏むの?>→Cへ

C: 違うよー! 杵の先みたいのがついとるやつ、それを
足で踏むんよ。

<そーかあ、それじゃあ危ないですよねー。>

C: うん。やけ、素人がやると危ないけんー、やりつけ
た人やないとやられんのよー。杵でつく方が楽よ。ま
ぜる方が危ないけんね。

<Bさんとこも?>

B: うーん、うちんところは少し田があったからねー。2
階に抱えて…。

Cさん また手をパタパタとしている

C: (Bさんへ) やっぱ、乾くまで置いてね、そのまま

2、3日おくけん手間がかかるね。

Bさんは、Cさんに話を返そうとするが、Cさんはそれを聞かずに、Thに向かって話す

C：うち方は彼岸も2回つくでしょうが。お彼岸2回、正月、お盆、うちは4回つきますけんね。ついて乾かせば、いつでも食べられる。

B：(Thに対して)うちんところは、ある程度乾いたら小さく切るのね。

<カキモチですね。>

B：おばあちゃんが、なかなか食べさせてくれないの。おやつといたらカキモチ。

<Cさんは？>

C：作ったですばい！

B：(Thに対して)おやつといたら、そんなもんしかないもんねー。

C：いろいろして食べるもんね。

B：(Cさんへ)子どものおやつやもんねえ。

C：やっぱり子どものおやつにいいでしょうね。

B：おいしいでしょうね、それと、焼いて食べたら…。

<Fさんは餅ついたことありますか？>

F：そうですね。あります。

C：(割り込む)農家やけん、臼とかあるもんね。

<農家じゃなくてもあったんですって>

C：そうなの。

F：(Cさんへ)そうなのよ。町内で回ってきてたの。

<そうかー、面白いですね。>

B：商売について回る人がおるもんね。

<Fさんは自分ちついてたんですね？>

F：そうね。近所の人が貸してくれてね。あんこつめて…好きだったですね。

<あんこ餅好きだったんだって。>→皆へ

F：その時期が楽しみだったですねー。19日はいけないから、その前の日についてねー。

H：(Fさんへ)29日ていいたら押し迫るもんねー。

<Hさんちも、餅つきましたか？>

H：しました。そういう道具はないから、昔の天神の町から店の人が持ってきてやってくれるの。

<じゃあ、Hさんは食べるだけ？>

H：そうです(笑)。

<やっぱり干します？>→Hへ

H：そうね、全部食べるわけにはいかんもんね。

F：水餅もしますね。

<水餅？>→Fさんへ

F：冷たい水に、かめにね、入れる。

<それは？>

B：そうして保存するの。

<Cさんも？>

C：してたよー。悪くならんけん、水の中に入れて、そ

の水をずっと流してね。

<昔の人の生活の知恵ですね。>

F：そうですねー。

C：うちなんか餅持っていくもんね。博多の人間は元旦食べる餅しかない。うち方たくさんつくけん、そがん高かを買わんでもよかったいっち言ってね。いとこは、うちとこ以外みんな博多やけん持って行った。

<田舎の方がよかった？>→Cへ

C：そうね。

H：私は町の方がよかった。(一同笑)

B：今でも西鉄ストアでついていますよ。1升いくらで。

(Hさんへ)つくといろいろ大変やけんね。

Cさん 手をパタパタしている

C：あっちやら親戚に配ってねー。

B：(Cさんへ)混ぜるのも難しい。

C：でも、慣れとるけんむつかしくない。まぜつけんもんがまぜると危ない。

<Gさんもまぜた？>

G：はい、まぜましたよー。

C：(割り込んで)やってみましたよー。

G：ならべてな、もう行くことない。

<お正月の餅はどこに供えてましたか？>→Cへ

C：教会と仏壇やら…。

<教会？キリスト教の教会ですか？>

C：金光教。

<宗教もいろいろありますよね。>

H：(Thに対して)金光教っていうのは、どなたがまつられているんですか？

<私は知らない。Cさん、どうですか？>

H：(Cさんへ)誰をまつってあるの？

C：知らないの？知らない人は教会がどこにあるか、どんなかはわからんやろねー。(会話が噛み合っていない)

<総本山は岡山にあるんでしょう？>

C：そうそう何回も行った。

<Hさん、わかりますか？>

H：いや、わかりませんねー。総本山は岡山にあるの？

<江戸時代くらいにできたんですよ。>

H：へえー、私、金光教というのは聞いたことあるけど、手を合わせたことはない。

<Hさんはキリスト教ですか？>

H：いや、普通の神社です(笑)。

C：私はここに来るときも、榊を枯らさんように息子たちに言っとるんですよ。だから、帰ったら結構お金がいらいます。金やって、水かえて、お神酒あげて、毎月のことだから。

<お寺参りもなさるんですか？>→Cへ

C：しょっちゅうですよー。毎日掃除もするしね、婦人

部が。しょうほう寺があるでしょうか？ 幼稚園があつてね…。

<Dさん、お正月のお餅は神様にあげたり？>

D：神様が一番、仏様が二番、その次が台所ですね。

<お正月には鏡餅をどこに供えました？>→Gさんへ

G：やっぱり神様でしょうね。

<Bさんも？>

B：学会も、お餅あげるんですよ。仏様に、本尊様にね。

<創価学会も、ちゃんとおまつりするんですよ。>

B：はい、やりますね。

<ふーん・・・いいものはまず仏さん・・・>

Cさん、またカツカツ指でテーブルをたたいている

<Hさんは？>

H：まず、玄関ですね。

C：たいていそうですばい、どこでも。

<今は変わりましたよね。Fさんとは？>

F：仏さんとは一番。

<仏さんの方が偉いんですね。その次が神様>

F：あんころもちがうちらが食べる。

<仏様にはカキモチ？>

B：仏さんにはカキモチはしないですねー。

<昔は大変ですね>

H：(Thに向って) そうですねー。

H：ですから、日にちを決めて予約する人もいますよね。

<昔は餅=お正月でしたね>

H：そうですねー。楽しみが少ないからね。

<今の子は毎日がお正月みたいですね>

(3) 歌を2曲うたう。

<時間がきましたので、歌をうたいましょう。今日の歌は「たきび」です>

全員に歌詞を印刷した紙を配り、合図でいっせいにうたう。

<よくうたえましたね。次の歌は「夕やけ小やけ」です>

<大変上手にうたえましたね>

(4) 終わりの挨拶をする。

<時間がきましたので、今日のお話し会はこれで終りにします。この次は1月にまたお話し会をします。>

2. 発言回数

表2は12月20日の回想法実施中の参加者と治療者(筆者)の発言回数である。この回は10時丁度にスタートして、11時に終了している。表の説明をすると、表の左端は参加(この日の参加は7名であった)者名であり、発言チェックは5分間隔で数え上げていった。表中の“T”は筆者が参加者に発言を促して参加者が発言した回数で、

表2 発言回数

参加者	D	G	B	C	H	F	E
	T 自	T 自	T 自	T 自	T 自	T 自	T 自
10:00~10:05							
10:05~10:10							
10:10~10:15	0 0	0 0	2 1	4 3	0 1	1 1	0 0
10:15~10:20	0 0	4 0	0 0	2 1	0 1	1 1	0 0
10:20~10:25	3 4	2 1	0 4	3 1	0 0	0 0	0 0
10:25~10:30	0 0	0 0	4 7	3 6	0 0	0 0	0 0
10:30~10:35	0 0	0 0	1 4	1 7	0 0	9 3	0 0
10:35~10:40	0 0	0 0	0 2	5 3	4 3	7 1	0 0
10:40~10:45	0 0	3 0	3 2	3 9	1 6	0 0	0 0
10:45~10:50	0 0	0 0	0 1	9 6	3 4	0 0	0 0
10:50~10:55	2 0	2 0	7 1	0 2	6 4	3 0	0 0
歌	1 曲目	×	○	○	○	○	○
	2 曲目	×	○	○	○	○	○
合計	5 4	11 1	17 22	30 37	14 19	20 5	2 0

“自”は参加者が自発的に発言した回数である。これで見ると、筆者の参加者への発言がDさんとEさんに極端に少なくなっている。Dさんの場合は問いかけの意味が理解できずに不安が多いことがみられるし、Eさんの場合は記憶障害重く、記憶の再生に苦しんでいる様子が見られるので、筆者が遠慮していることがその原因である。なお、挨拶、体調チェック、「はい、いいえ」の返答はカウントしなかった。

5. この1年間に実施した回想法のテーマと使用した歌

表3はR施設、表4はH施設、表5はF施設、表6はS施設である。

表3 R施設でのテーマ

月	日	テーマ	う た	
1	15	お正月	1月1日	たきび
	28	カルタ 双六	雪	たきび
2	12	豆まき	豆まき	雪
	23	梅の花	たきび	雪
3	12	おひなさま	ひな祭り	春よこい
	31	花見	春がきた	春の小川
4	9	春の花	春の小川	めだかの学校
	30	鯉のぼり	めだかの学校	鯉のぼり
5	7	海の魚	鯉のぼり	背くらべ
	21	田植	茶つみ	夏は来ぬ
6	4	こくご	茶つみ	夏は来ぬ
	18	ほたる	夏は来ぬ	ほたる
7	9	七夕	七夕	夏は来ぬ
	23	せみ・とんぼ	七夕	夏は来ぬ
8	13	おぼん	夏は来ぬ	われは海の子
	27	花火	われは海の子	花火
9	16	お月見	つき	虫の声
10	1	運動会	虫の声	夕やけ小やけ
	14	稲刈	赤とんぼ	紅葉
	29	秋の果物	紅葉	夕やけ小やけ
11	11	いもほり	赤とんぼ	旅愁
	25	木の実	旅愁	故郷
12	15	子どもの時のあそび	故郷	七つの子
	24	もちつき	七つの子	たきび

表4 H施設でのテーマ

月	日	テーマ	う た	
1	14	お正月	1月1日	雪
	28	カルタ 双六	雪	たきび
2	12	豆まき	豆まき	雪
	22	梅の花	たきび	雪
3	12	おひなさま	ひな祭り	春よこい
	31	花見	春がきた	春の小川
4	9	春の花	春の小川	めだかの学校
	30	鯉のぼり	めだかの学校	鯉のぼり
5	7	魚	鯉のぼり	背くらべ
	21	田植	茶つみ	夏は来ぬ
6	4	こくご	茶つみ	夏は来ぬ
	18	ほたる	夏は来ぬ	ほたる
7	9	七夕	七夕	夏は来ぬ
	23	せみ・とんぼ	七夕	夏は来ぬ
8	13	おぼん	われは海の子	夏は来ぬ
	27	花火	われは海の子	花火
9	16	お月見	つき	虫の声
10	1	運動会	虫の声	夕やけ小やけ
	14	稲刈	赤とんぼ	紅葉
	29	秋の果物	夕やけ小やけ	紅葉
11	11	いもほり	赤とんぼ	旅愁
	25	木の実	旅愁	故郷
12	15	子どもの時のあそび	故郷	七つの子
	24	もちつき	七つの子	たきび

表5 F施設でのテーマ

月	日	テーマ	う た	
1	18	お正月	1月1日	雪
2	1	豆まき	雪	肩たたき
	15	梅の花	肩たたき	たきび
3	8	おひなさま	ひな祭り	春よこい
	22	花見	春がきた	春の小川
4	13	春の花	春の小川	めだかの学校
	26	鯉のぼり	めだかの学校	鯉のぼり
5	10	お母さん	めだかの学校	背くらべ
	27	川の魚	めだかの学校	どんぐりころころ
6	7	田植	茶つみ	夏は来ぬ
	21	ほたる	ほたる	夏は来ぬ
7	5	七夕	七夕	夏は来ぬ
	19	せみ	七夕	夏は来ぬ
8	9	おぼん	われは海の子	人形
	23	花火	人形	花火
9	27	小学生のころ	つき	七つの子
10	11	秋の果物	七つの子	虫の声
	25	稲刈	虫の声	紅葉
11	22	木の実	旅愁	故郷
12	6	子どもの時のあそび	故郷	たきび
	20	もちつき	たきび	夕やけ小やけ

表6 S施設でのテーマ

月	日	テーマ	う た	
10	18	秋の果物	七つの子	虫の声
11	1	運動会	虫の声	紅葉
	15	いもほり	紅葉	旅愁
	29	木の実	旅愁	たきび
12	13	子どもの時のあそび	たきび	故郷

6. 回想法実践上の課題

筆者が回想法を行っている4つの施設はその3つの施設が認知症者のグループ・ホームであり、残りの1つの

施設が特別養護老人ホームである。回想法に参加している高齢者は24時間、これらの施設で生活している。筆者は2001年以降、回想法を展開してきたが、実践していく中でいろいろと感じたり、考えていたことがいくつかあるので、実践上の課題として述べることにする。

(1) 事前の準備について

回想法の実施を依頼されたら、回想法への参加者の生活歴や興味・関心や生活習慣などについての情報をできるだけ集めることが必要である。その情報は参加者本人や参加者の家族や毎日参加者の援助をしている施設職員などからできるだけ正確な内容を知ることである。これらの内容は回想法のテーマを検討する際の基礎的資料となるし、各参加者の目標を設定する際の参考資料ともなる。

認知症者のグループ・ホームの利用者は全員参加者するので、参加者の選考をする必要はないが、特別養護老人ホームの認知症者の参加にはある程度の選考をすることになっている。選考の際には、施設のスタッフと相談して、基本的には“自分の気持や意志を言葉で表現できる人”と考えている。

(2) テーマの設定について

テーマの設定については歴史的に出来事を年代順にならべたり、発達段階を追ったりする場合がある。しかし、筆者は事前に得た参加者の情報をもとに、全員が参加しやすいものを考えていった。

テーマの設定にあたっては、参加者が児童期に全員が体験できたと思われる事柄を中核において考えることにした。一つ目は、日本の伝統的な行事、1月はお正月、2月は節分、3月は桃の節句、5月は端午の節句、7月は七夕、8月はお盆、9月は月見などである。二つ目は、自然の変化の中で体験したもの、2月は梅の花、3月は桜の花見、4月は春の花、6月はほたる、7月はせみ・とんぼ、10月は秋の果物、11月は木の実などである。三つ目は、昔は農業中心的社会であったために影響を受けたと思われるもの、5月は田植、10月は稲刈、11月は芋掘り、12月は餅つきなどである。四つ目は、子どもの時のイベントとして体験されたもの、1月のカルタ・双六、8月の花火、10月の運動会などである。五つ目は、その他のものである。

表3、表4、表5、表6は以上のような考えによってならべられたものであり、施設によっていくらかテーマが異なっている。後で眺めると、四季の変化に応じたテーマになっているように思う。

(3) 刺激材の用意について

回想法は最初、はじめの挨拶から始まり、体調のチェックが終わって、リーダーがその日のテーマについて説明することになる。健康高齢者であれば、言葉で「子どもの時のあそびについて今日は話しましょう」と説明すれば、子ども時代のあそびの様子を思い浮かべることができると思う。その思い浮かべたイメージをもとにして、

話しが発展していくことになるだろう。

しかし、認知症高齢者ではなかなかイメージを思い浮かべることが困難である。そこで回想法を促すための刺激材が必要となる。その日のテーマによって実物であったり、写真であったり、模型であったりする。また、テーマによっては、参加者の一人一人に手に取ってもらえるように多めに用意する。また、刺激材は1種類だけでなく、数種類を用意する場合もある。

例えば、「子どもの時のあそび」のテーマの時、お手玉と風船をグループにそれぞれ1個だけしか用意しなかった会と、お手玉、風船、おはじき、コマ、ビー玉を参加者全員にそれぞれが手に持てるように用意した会を比較した場合、後者の方が参加者の発言は多く、参加者同士の交流も多くなる。

このような経験から回想法終了後、次回の打ち合わせを施設のスタッフと行う際には、次回の刺激材の用意について慎重に話し合っている。

(4) リーダーの役割について

回想法においては、リーダーの役割は重大である。先ず、テーマの設定や刺激材の用意などについて幅広い知識と洞察能力が必要となる。

次いで、回想法の実施においては、臨床心理学的配慮と臨床心理学的技能を必要とする。参加している認知症高齢者は心理的不安定を抱えており、この人たちがこの回想法を経験することによって、心理的安定へと変化することを期待している。

回想法の中ではリーダーは参加者の発言をゆっくりと聞きながら聞き、その発言内容を繰り返す。このとき、その参加者だけではなく、他の参加者にも、もう1度知らせるつもりで話す。それによって、他の参加者がそれに関連した自分の体験を、最初の参加者や周りの参加者に伝えていく。これが重なれば参加者同士の共感を深めることになる。

リーダーは回想法のスターターであるが、話が展開し始めたら、聞き役、あるいは展開役になる必要もある。

参加者の中には、グループの動きにとけこめない人もいる。そこでリーダーは意識的にその参加者に声をかけたり、話し安い雰囲気作りに努め、他の参加者の注目を集める機会を作る。

また、参加者の中には、長く話をする人がいる。そういうときは、先ず、その話をじっくり聞いて、参加者が何を話したいのか理解し、適切な援助が必要である。

いずれの時点においても、参加者の個々の発言がグループの動きに活かされ、全体の流れの中に個々の回想が反映されるように配慮することである。

(5) コ・リーダーの役割について

基本的には、リーダーが中心となって回想法を運営していくが、コ・リーダーはリーダーに劣らず重要な役割をもっている。

先ず、テーマの設定や刺激材の用意にあたっては、リー

ダーに対してコ・リーダーとしての意見を述べて、リーダーを援助することが大切な役割である。コ・リーダーはその施設で毎日参加者の生活を観察しているのので、正確な情報を持っているからである。

次は、回想法の場の運営である。回想法の日が近づくと、参加者の大部分はこの会をある程度待っていることが多い。このためには時々、参加者に回想法が開かれることを予告することが必要である。また、回想法は1時間という限られた時間で行うため、開始時間が近づいてきたら、参加者を回想法開催の場に誘導する役割をもっている。

3番目は回想法の場で、参加者の援助をすることである。参加者の中には聴覚障害者がいれば、通訳的な役割を果たすことが必要である。また、会にスムーズにとけこめない参加者がいれば、その隣にコ・リーダーが座り、コミュニケーションを図りやすいように援助する。

参 考 文 献

1. Butler R.N.1963 The Life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry* 26 65-76
2. 野村豊子 1992 回想法グループの実際と展開—特別養護老人ホーム居住老人を対象として *社会老年学* 35巻 32-46
3. 黒川由紀子 1994 痴呆老人に対する回想法グループ *老年精神医学雑誌* 5巻1号 73-81
4. 野村豊子 1995 回想法 *老年精神医学雑誌* 6巻12号 1476-1484
5. 黒川由紀子 1998 老いの臨床心理 *日本評論社*
6. Julie Scott and Linda Clare 2003 Do people with dementia benefit from psychological interventions offered on group basis. *Clinical psychology and Psychotherapy* 10 186-196
7. 野村勝彦 2004 痴呆性老人に対するグループ回想法の研究 *福岡女学院大学大学院紀要 臨床心理学* 1 37-41